

楽しい仏教用語

その27

【玄関(げんかん)】

家の正面で入り口を「玄関」と呼んでいます。表入口という意味なのでしよう。みえを張って外観だけを豪華に見せようとすることを「玄関を張る」といい、面会させないで客を帰らせることを「玄関ばらい」といいます。

この玄関は仏教語なのです。本来は建物の名前ではなく、『玄』妙な道に入る『関』門という意味で、奥深い教えに入る手始め、いとぐちを指していました。「禅門に入る」などがそれです。

この仏教語が建物の名前となり、禅寺の客殿に入る入り口を指すようになりました。やがて、室町時代から桃山時代にかけて盛んになった書院造りに、その形式がとり入れられました。



本堂前の手水鉢 善教寺「石」シリーズ その9
本堂正面の納骨堂前にあります。

まだ庶民住宅には造ることを許されていませんでした。江戸時代になって、民家や一般の建物にも広まり、明治以降は現在のように正面入り口を呼ぶようになりました。

【高座(こうざ)】

寄席では、演芸を演じる場所を高座といいます。劇場の舞台に匹敵するところです。ここで落語や講談、浪花節など演じられています。これはご承知の通りです。

寺院で法要のとき、導師のすわる仏前の一段高い座を登高座といい、説教のときに講師のすわる高い座を高座といいます。高座は、お釈迦さまが悟りを開かれた金剛宝座から始まり、その後、説教者や導師のすわる高座となっていたようです。寄席の高座は、説教者の高座から転じたものです。もともと、落語や講談、浪花節などの大衆話芸は、仏教と深いかわりがあり、仏教の説教を母体として始まったものです。

ところが、戦後、寺院の布教は、説教から講演式に変わり、演台の前で立つて行われるようになり、説教者のすわる高座は、本堂から姿を消したところが多いようで、もっぱら寄席にその名を残しているようです。

(辻本敬順氏「仏教用語辞典」参照)

住職レター

秋のお彼岸の頃ある場所で講演をさせていただきました。依頼された演題は、タイムリーなお彼岸について。対象者は、会社経営者。



本願寺にて

会社経営者の方々はお彼岸の話なんて興味を持たれていないかと思いきや、仏教の話は聞く機会がないそうで、意外と興味津々。

シナリオ通り、話の冒頭は、お彼岸の話。どちらかと云うと、真面目な話。これでは面白くなかったため、途中から『シニョカツ』にスイッチ。あの『終活』の話です。

さすがに会社経営者皆さん、死後の世界(彼岸)より、今(此岸)の方が、興味深い様子。

終活とはつまり、自分の死を想定し準備をすること。生前に葬儀や墓などの準備をしておく。自分が死んだ時、誰に死を伝えたいか。葬式はどんなスタイルで勤めるのか。家でするのか会館で勤めるのか。宗教はどの宗派を信仰し、どこの寺の住職さんに勤めてもらうか。

会社経営者の皆さんは、それこそ日々の会社経営に忙しく、自分の終活までは、まったく考えが及ばなかったようです。もともと『自分の死の準備をしない！』なんて言葉、寺の坊さんくらいしか、云えませんからね。

今後、葬送のスタイルは、大きく変わってくるでしょう。今は、家族葬が流行っていますが、その次にくるのは直葬。いわゆる、宗教儀式なしの葬送スタイル。

核家族化、人間関係の希薄化がもたらす負の部分、その行きつく場所を考えると、なんだか悲しくなります。

悲しい社会にしないよう、我々坊主の頑張りどころでしょうか。

